

## 「ART BY STUDENTS —生徒作品ギャラリー」のご案内

**光** 村図書ウェブサイト上で、全国の中学校・高等学校の生徒作品をご覧いただけるコンテンツ「ART BY STUDENTS—生徒作品ギャラリー」が公開になりました。作品画像と合わせて、その作者である生徒の言葉をご紹介します。サイトトップ「おすすめコンテンツ」の、「ART BY STUDENTS」のバナーをクリックすると、中学校のコンテンツへ進むことができます。全国の中学生・高校生がどんな作品をついているのか、ぜひご覧ください。



### ART BY STUDENTS —生徒作品ギャラリー

中学生の生徒作品を紹介するコンテンツです。作品の画像と作者（生徒）の言葉を掲載しています。全国の中学生がどんな作品をついているか、見てみませんか。

- 身近なものを描く・つくる**  
身の回りにある植物や動物、日用品などをあらわした作品です。
- 風景を描く**  
学校や地域、旅先の風景を描いた作品です。
- 人物を描く・つくる**  
友達や家族などを描いた・つくった作品です。
- 想像して描く・つくる**  
夢や想像の世界を描いた空想画や、だまし絵などの作品です。

中学校「ART BY STUDENTS」トップページ。  
風景画や空想画、デザインなど、さまざまな作品を見ることができます。

中学校は  
こちらから。

高等学校は  
こちらから。

### 美術準備室 No.14

2018(平成30)年11月28日

発行人 ■ 小泉 茂  
 発行所 ■ 光村図書出版株式会社  
 〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9  
 電話：03-3493-2111  
 www.mitsumura-tosho.co.jp  
 E-mail:koho@mitsumura-tosho.co.jp  
 デザイン ■ Better Days  
 (大久保裕文+深山貴世)  
 印刷所 ■ 株式会社 加藤文明社



本誌は、文部科学省による「教科書採択の公正確保について」に基づき、(一社)教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」のとおりに配布しております。



アトリエ  
訪 問

第 14 回

小畑多丘

彫刻家

カラフルな洋服に身を包み、立ったりしゃがんだり、  
思い思いにブレイクダンスのポーズを取る等身大ほどの人形たち。  
台座のないこれらが木彫だと、何も知らずに見た者の誰が思うだろうか。海外にも多くのファンをもつ  
彫刻家・小畑多丘がB-BOY(ブレイクダンサー)の木彫を生み出すアトリエへ向かった。

撮影 鈴木俊介



おばた・たく  
1980年埼玉県生まれ。  
2008年東京藝術大学大学院修了。  
B-BOY(ブレイクダンサー)としても活動。  
ブレイクダンスの身体表現技術や躍動を彫刻で精力的に表現し続ける。  
台座のない木彫による人体と衣服の関係性、彫刻を端緒に生まれる  
空間を追究しながら、緊張感と迫力あふれる作品を展開。  
近年の展覧会に「超えてゆく風景」展  
(ワタリウム美術館, 2018年)など。

## 「日本で生まれ育った自分らしい表現 ——その答えが木彫だった。」



1枚のドローイングを1分ほどで描いていく。  
彫刻で重要な手前・中・奥の3層を、色を使って意識する。



幾種類ものノミや彫刻刀を使い分ける。  
左右で偏りが出ないよう、両手を同じように使って彫るという。

トパネルを敷いたり、壁を白く塗ったりと、使いやすいように自分で改造しました。

普段はシャッターを開けて、半分外みたいなきらきにして彫っています。いちばん集中できるのは夜。特に冬の夜はまるで世界から音がなくなったかと思うほど静かだから、没頭できます。もちろん、チェーンソーを使ったりするのは日中ですけれどね。

長時間集中して疲れると、入り口近くに腰かけてひと休みします。木の緑がとてもきれいで、地面には犬のニコが寝そべっている。すごくリラックスできるんです。——小畑さんが木彫で表現されているB-BOY(ブレイクダンサー)は、あまり見ない新しいテーマですね。

**小畑** ブレイクダンスは、高校時代に始めて夢中になって以来、自分の中で大切なテーマです。だから、何かを表現して生きていきたいと思ったとき、その「何か」はブレイクダンスしか考えられなかった。

木彫と出会ったのは、大学に入ってからです。このとき、木の存在感にすっかり心を奪われて、木彫の道に進むことにしたんです。

ただ、いちばん大きかったのは木彫が日本の伝統文化であるというこ



目や洋服のライン、女性の前髪など、細かなところに水平・垂直の要素を潜ませ、見る者に不思議な緊張感を与える。  
(写真提供: 小畑多丘)

と。ブレイクダンスはアメリカの文化です。それを粘土でかたどってプラスチックに置き換えて表現しても、アメリカ文化の追随にしかならない。日本で生まれ育った自分には、どんな表現ができるのか——その答えが木彫だったんです。それに、木彫でB-BOYをつくっている人なんて、他にいないと思って。

——彫刻にするポーズはどうやって決めているのですか。

**小畑** 誰かをモデルにすることはほとんどなくて、ひたすらドローイングを重ねながら考えていきます。その中でこれと思ったものは、正面や横からドローイングを描いて立体に起こしていく。

実は、ポーズは、実際にまねするには難しいものになっているんです。身体の構造上可能なぎりぎりのラインを攻めてつくっているから。このぎりぎりのさじ加減は大事にしているところです。

自分の作品が台座がなくても自立できるようにしているのは、緊張感を生み出したいから。そのために、水平・垂直を測って細かく計算しながら、緻密につくりあげています。作品が大きいと、彫るために向きを変えるのもひと苦勞なので、こう見えてかなり計画的につくっているんですよ。

そういう制作が続くと、バランスを取るために、衝動的なものがつくりたくなります。無心で粘土を触ったり、彫刻を意識しないドローイングを描いたり。でも、ここにはそれを同時にできるほどの広さはない。

そろそろここを離れて、新しい世界に一步を踏み出すときが近づいているのかもしれない。今よりもっとカッコいいブレイクダンスの表現を追究するために。

東京近郊の閑静な住宅地にそのアトリエはあった。門を開けると、1頭のダルメシアン犬が出迎えてくれる。耳を澄ませば鳥の声が聞こえ、目の前には葉が茂る大きな木。ガレージの姿を残す建物に近づくと、床に積もったクスの木くずとその香りが、ここが彫刻家のアトリエであることを教えてくれた。

——このアトリエ、もともとはガレージだったのですか。

**小畑** そう。家でほとんど使わなくなっていた物置用のガレージをアトリエにしたんです。床にコンクリー



特集

# 地域の季節を表した 和菓子をつくらう

和菓子のデザインは、全国で広く取り組まれている題材の一つです。この題材で、生徒一人一人の感性を磨き、発想・構想の力を高めるには、どのような授業が考えられるのでしょうか。

撮影 鈴木俊介 (P5右下写真を除く)

## 授業レポート

秋田県大仙市立西仙北中学校

田中真二郎先生 × 2年生  
(A・B・C組各25名)

古来、和菓子は季節感を豊かに盛り込み、四季折々の日本の美しさを表現してきた。今回の授業では、そうした和菓子ならではの特徴に学び、自分たちの地域の季節を表した模型づくりを行う。生徒は、自分たちの地域にどのようなよさや美しさを見だし、それらにどのような色や形を与えたのだろうか。

### 第1時 和菓子って何だろう？

「甘いもの、好きな人？」「和菓子が好きな人？」「ケーキが好きな人は？」。田中先生が矢継ぎ早に質問を投げかける。生徒たちはとまどいながらも次々と手を挙げていく。「カステラって、和菓子？ それとも洋菓子？」と首をかしげる生徒もいる。先生はすかさず、和菓子の種類、駄菓子や洋菓子との違い、食べる時のシチュエーションについて問いかけることで、「和菓子」の概念を生徒たちと共有していった。

「これから、自分で考えた和菓子をつくっていきます」と宣言した後、

先生が取り出したのは、和菓子のアートカード。一つ一つ異なる和菓子のイラストが描かれた12枚のカードを「ある順番」に並べてみようというのだ。「季節」で分けられそうだと試行錯誤する生徒たち。先生は、これらが1月から12月までの和菓子を表すことを伝え、それぞれ何月の和菓子なのか考えるよう促す。生徒たちはしだいに、季節による和菓子の「形」や「色」の違いに注目していった。

ここで先生が問いかける。「季節ごとに多様な和菓子がつくられるのは、なぜだろう？」。生徒たちがつぶやく。「月ごとにお菓子が変わっていくから、それが楽しみになる」「日本には独特な季節の特徴があって、色彩が豊かだから」「昔から日本人は季節を彩り、味わってきたので、和菓子もそうなのだと思う」。

ここでは結論を急がず、「では味わって考えてみましょう」と、グループに一つずつ、「紫陽花」を表した本物の和菓子を配る。すぐに食べようとする生徒たちに、先生は、「見



「こんなにさまざまな季節を表した和菓子がつくられてきたのは、なぜだろう」と問いかける田中真二郎先生。

た目」をよく観察するよう促した。それから、切ってみたときの「感触」と「匂い」。最後に、食べたときの「味」。生徒たちは、感じたことを言葉にしていく。それらを黒板に書き留めた先生は、それぞれ和菓子を楽しむときに使う「視覚」「触覚」「嗅覚」「味覚」に分類した後、「では聴覚は？」と尋ねる。生徒は答えに困りながらも、先生からのヒントを手がかりに、和菓子には「名前」があり、それを耳で聴いて楽しむことができる気づいていった。

その後、先生が見せたのは、ある著名な和菓子職人のインタビュー映像※1だ。一流の職人の哲学とその手から生み出される和菓子の美しさに生徒は息をのみ、ただ静かに見つめ、聴き入る。職人の姿と言葉からも、五感を大切にしていることがうかがえる。「和菓子は五感で楽しむものなのですね」と、先生。生徒たちは答える。「口の中で味わいなが



左／アートカードに描かれた和菓子のモチーフをヒントにしながら、どの季節に合わせたものなのかを考える。右／グループごとに配られた和菓子の形を崩さないように、そっと切り分ける。

※1 NHK Eテレの番組「JAPANGLE」の「#9 お菓子」の回で取り上げられている和菓子職人・水上力氏のインタビューと制作風景の映像。現在、「NHK for School」のサイト内で閲覧することができる。



生徒たちは、これまでに、浮世絵の鑑賞の授業で江戸時代の「職人」について学んでいる。本題材に入ってから、映像や資料を通して和菓子職人の仕事ぶりや考え方に接してきたことで、「職人のこだわり」について、それぞれに受け止め、考えをもつことができているようだった。

\* \* \*

美術室には、粘土を加工するためのさまざまな用具が用意されている。生徒は、先生に相談したり、友達どうしでアイデアを出し合ったり、用具の使い方を教え合ったりしながら、自分がイメージした色や形や手触りを再現しようと、実験と試作を繰り返して行く。



上/やわらかい雰囲気になるように、薄く伸ばした樹脂粘土で求肥のように包む。  
左下/おろし器・こし器・絞り口・細工用のはさみなど、和菓子の成形に使えるような用具を自由に選んで使う。  
右下/扱いに注意が必要なレジンには、屋外の先生の目の届くところで、使い方を説明したうえで使わせる。

制作の最終段階の時間、先生は「自分が見つけたふるさとのよさが本当に表現できているか」を考えさせることで、生徒たちを創作の原点に立ち返らせた。そして、今回の作品が「自分が見つけたよさを地域の人たちに向けて発信するもの」だということ想起させ、妥協せずに今からでも作り直してよいと伝える。和菓子の模型という、小さくて時間をかけずに制作できる題材だからこそ、ここまでのこだわりや追究を生徒に求めることができるのだろう。

### 第9時 和菓子に込めた思い

この時間は、グループに分かれて作品を鑑賞し、それぞれの作品が表す季節とテーマを考え、感想を交流

する。生徒たちは、友達が見つけた「西仙北のよさや美しさ」や工夫の一つ一つに目を輝かせる。そして、自分の表現の意図を語り、それがどう伝わったのか、どんなところが伝わりにくかったのかを振り返っていった。

授業の総まとめとして、最後に田中先生は、「調和の取れた、洗練された美しさ」とは何か、自分の作品をもとに考えてワークシートにまとめさせた。

〈生徒の考え〉

●昔からの日本人の美意識だと思いました。

●複雑なものではなく、単純なものの方が自分の思いや考えが伝わる。その単純なものの色や形が誰にでも伝わるものになったのが、「調和の取れた、洗練された美しさ」だと思う。

●最初は、どうしたら美しく見えるかということしか考えていなかったけれど、「調和の取れた、洗練された美しさ」を考えるうちに、美しいだけでなく、どう省略してイメージを伝えるかを意識して制作することができました。

\* \* \*

洗練とは何か、美しさとは何か。生徒は、制作を通して、こうした抽象的概念を感得し、自分なりの「言葉」で語っていた。そして、こだわりをもって制作していくなかで、自分たちが暮らす地域を見つめる目も、研ぎ澄まされてきたようだった。



【特集】  
地域の季節を表した  
和菓子をつくらう

## 私の「こだわり」

Kさん



おものがわ  
「雄物川」  
(春)



春、学校近くを流れる雄物川が光に照らされ、紫に見えて美しかったことを思い出し、それを和菓子にしようと考えた。



「日本らしい色」にしたいと考え、紫は菖蒲色、緑は若竹色に見えるような色をつくった。

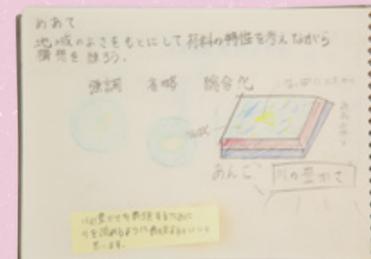
太陽の光が水面に当たって光る様子を金箔で表した。



Sさん



「川のせせらぎ」  
(夏)



夏に見た雄物川が太陽と重なってきらきらしていた。その美しさと川の豊かさを表すことにした。



台座の部分は、何度も試作を重ねて、涼しそうな透き通った色を出した。

最後に金箔を飾り、きらきらした様子を表現。



Tさん



「冬の大勝負」  
(冬)



かりわの大綱引き(※3)の熱気を二つのチームカラー(黄・赤)で表そうと考えた。あえて「綱」の形にしないのがこだわり。



おいしく見せるために丸い形を選び、レジンで試作。苦労してつくったが、形や色がイメージに合わないと考え、樹脂粘土でも試すことに。

樹脂粘土で丸くふくらした形に。粘土を削ってつくった白い粉と金箔をあしらって完成。



※3 刈野の大綱引き 毎年2月、本校の学区である大崎市刈野で行われる大綱引き。上町(二日町)と下町(五日町)に分かれ、大綱を引き合う。

# 自分流『枕草子』

## 和菓子

今回の授業と並行して行われたのが、「ふるさとの四季を『枕草子』風に文章で表現する」という国語の授業。国語の時間に書いた「自分流『枕草子』」を生かして発想を膨らませた作品をご紹介します。



Gさん 「夕暮れの空」  
(初夏)

帰り道に見えた夕暮れを、雲をイメージした白色から、夕暮れのオレンジ色へのグラデーションで表現。ラメは、夕日の輝きを表す。

夏は夕暮れ。  
学校の帰り道を自転車で走る。  
空はオレンジ色で  
たんぽぽの色が映り、  
風で水面が光るのがきれいでいい。  
木の揺れる音もまるで  
川の水が流れるようで、趣があっ  
ていい。



Sさん 「梅雨に潤う葉と花」  
(初夏)

色を混ぜすぎないようにして、水面に映る花や草の色を出した。餡とゼリーの2層にすることで、西仙北の梅雨の感じを表現。

夏は梅雨。  
昼寝のときに聞こえる雨のはじける音は、  
言いようもないほど趣深い。  
紫陽花や蜘蛛の巣に残るしずくがたいへん美しい。  
雨が降り続いて、湿っぽくなるのは好ましくない。  
雨が降り終わり雲が去って虹が薄く  
かかっているのがしみじみとしたものを感ぜさせる。  
それが水面に映るのはとてもいい。



Tさん 「花火」  
(夏)

「洗練された美しさ」を意識し、シンプルな形にすることに。中央の黄色い部分は花火の中心の光を、金粉は火の粉を表す。

夏は夜空。  
ほのかに光っている  
小さな星を  
眺めるのもいいが、  
強い輝きで彩る花火も、  
これもまた  
言いようもないほど  
趣深い。

## 授業を終えて ふるさとを誇れるように

地域の創作和菓子づくりは、私が大切にしている授業の一つです。単に美しい和菓子をつくることだけが目的ではありません。生徒にとって、自分たちが暮らす地域を見つめ、身近にある「美」を探したり、地域のよさを新たに発見したりする機会となることも目指しています。

本実践は、5年前から地域の菓子店の協力のもと、生徒がデザインした和菓子を商品化するプロジェクトに発展しています。中学生の視点で見つけた、感じた美しさを、和菓子を食べることで今度は地域の大人に感じてもらう——そうして、地域全体でふるさとを誇れるようになってもらいたいと思うのです。協力してくださる地元企業と一緒に、この地域の「文化」をつくっていきたくと考えています。

日本人として、自然と共に生き、自然を愛でながら遊び心をもって楽しんできたこと。生徒はそこから、豊かな生き方とは何かをそれぞれに感じることでしょう。デジタルな時代だからこそ、自分の諸感覚を働かせてモノをつくる経験を大切にしたいものです。今後も、生徒の実態や時代性に合わせながら、生徒と共に作り、考えていきたいと思ひます。



田中真二郎  
たなか・しんじろう

秋田県生まれ。秋田県大仙市立西仙北中学校教諭。宮城教育大学大学院修了後、宮城県私立高校非常勤講師、秋田県内の公立中学校を経て、2013年4月より現職。教育課程研究指定校(国立教育政策研究所、平成26年～28年度指定)。2012年、博報賞受賞。

## 授業を参観して

光村図書中学校「美術」の著作者である直江俊雄先生に、今回の授業を参観していただきました。



直江俊雄  
なおえ・としお

愛知県生まれ。筑波大学芸術系教授。筑波大学卒業後、東京都内の公立中学校教諭を経て、筑波大学大学院修了。博士(芸術学)。ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ客員研究員などを経て、2014年より現職。共著に『美術教育ハンドブック』(三元社)など。光村図書中学校「美術」教科書の著作者を務める。

## 響き合う 工房の仲間たち

今回の授業で用いられた指導方法の鍵は、表現過程を導く課題設定に、多面性と相互関連性をもたせたことだといえます。「何でも自由に表してよい」ではありません。「和」菓子とは何か、四季の移り変わりはどのように表せるか、五感を使って楽しむとはどういうことか、ふるさとを表すモチーフは何か、地域の人々にどうアピールするか、言葉を形にできるのか、洗練とは、調和とは……。和菓子をつくるという課題の中で、生徒たちは次々と答えのない問いを投げかけられます。そして、先生は常に「自分はどうか考えるのか」「それを人にどう伝えるのか」という表現活動の根本に立ち返る問いを、投げかけているのです。

この授業の輝きを支えていたのはそれだけではありません。この教室自体が、生徒が互いを認め合い、美術を通して人生を楽しむことを学ぶ場となっているように思いました。教室を見回すと、これまでのプロジェクトで作成した印象的なオブジェや展示、資料コーナー、特殊な材料を扱うスペースなどが、洗練されたカフェやインテリア展示場のように美しく配置されています。

何よりもその居心地のよさは、そ

こにいる人々によって互いに形成されているようでした。生徒たちが「〇〇さんのこれって、すごいね」「ああ、そういうことなんだ」「こうしたんだけど、どう思う」と、当たり前のように、あちらでもこちらでも、互いによいところを指摘したり、意見を求めたりしているのです。先生が「他の生徒の作品のよいところをワークシートに書きましょう」と指示したわけではありません。生徒たちが各自の技術的ブレークスルーを目指して切磋琢磨する姿は、互いの挑戦を称え合う“創造的な工房”ともいえるような場をつくりだしていました。

このように優れた学習環境としての人間関係は、今回の授業だけで形成されたものではないでしょう。田中先生は、造形作家としての力もあり、技法的には高度なものが教えられますが、授業では生徒が自分で考えた表現をサポートすることに徹しています。一人一人に声をかけ、何を考えているのかを聞き、すぐには助言を与えずに生徒と一緒に考える時間を楽しんでいるように見えました。田中先生の、教育者、美術家、空間デザイナー、あるいは工房親方としての生き方ともいえる日々の振る舞いから、生徒たちは、美術を通して互いを認め合う場をつくることのすばらしさを体感しているのです。



特集 | 地域の季節を表した和菓子をつくらう

# 作家の肖像

第 14 回

このコーナーでは、  
毎回一人の作家を取り上げ、  
美術評論家の酒井忠康先生に、  
お話をうかがいます。



Photo: 関野欣次

## 1941- 安藤忠雄

あんどう・ただお  
1941年大阪府生まれ。独学で建築を学び、69年に安藤忠雄建築研究所を設立。79年に「住吉の長屋」で日本建築学会賞、93年日本芸術院賞、95年プリツカー賞、2005年国際建築家連合(UIA)ゴールドメダルなど受賞多数。10年文化勲章を受章。17年国立新美術館で過去最大規模の個展「安藤忠雄展—挑戦—」を開催。

### 自然と格闘する姿勢

今から25年ほど前に行われた、ある美術雑誌の座談会。それが安藤忠雄さんとの初めての出会いでした。「現代美術の深層にまで関心が届いている人」——それが、安藤さんの話を聞いて抱いた私の第一印象です。それから少しして安藤さんは、「<sup>ちか</sup>近<sup>あすか</sup>つ飛鳥博物館」の建築で日本芸術大賞を受賞した。賞の選考委員に加わっていた私は、そのとき初めて安藤さんのもつ自然観、自然と格闘する姿勢を目の当たりにしました。格闘といっても、力でねじ伏せようとするものではない。一緒に転げ回り、泥んこになって仲良くなるとでもいうのでしょうか。とにかく自然を扱わせたらピカイチ。そんなイメージをもったものです。

そしてこのとき、共通の友人であった三宅一生さんの計らいで食事を共にしてから、安藤さんとの親しいお付き合いが始まりました。安藤さんは、著書が刊行されると、決まって直筆のサイン入りで贈ってくれます。自分が手がけた建築のイラストも添えて。そんなふうに、互いの著書や手紙をやり取りしながら、交流は長く続いています。

### 発想は衝突の瞬間に

会えばいつも、独特の大阪弁としゃがれ声でおもしろい話をしてくれる。それが安藤さんです。あるときは、「自分は今、内臓がほとんどない。生きているのが奇跡だといわれているから、最近よばれるのは建築についての講演でなく、『内臓がなくても生きていける』という話をする講演」と笑う。まったくサービス精神

が旺盛な人です。

また、ある授賞式では、受賞者としてのスピーチを終えて席に戻ると、次のスピーチを聞くやいなや、鉛筆と手帳を出してメモを取り始める。まるでその瞬間を逃すまいとするかのように。頭の中ではいつも思考が動き回っていて、それが外部の何かと衝突した瞬間、新しいことに気づく。この発想力が安藤さんの安藤さんたるゆえんであり、脅威なのです。

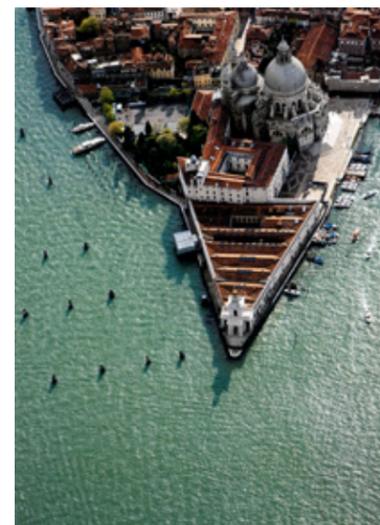
### 先頭に立って動く人

私は、安藤さんの「兵庫県立美術館」が好きです。美術館としては大きすぎるからか、あまり高い評価は得なかった。しかし、これを「街の一部」として考え、いずれ大きな文化施設に成長していくものと見るならば、この大きさには説得力があるでしょう。この美術館には、時間をかけて育てていく喜びが内在している。私はそこに強く惹かれるのです。

安藤さんが世界的な建築家として高い評価を得ているのは、その建築が気合に満ちていて、同時に、素直で気取ったところがないから。そして、彼が説教者ではなく、先頭に立って動く人であるからだ。私は思います。人間味豊かで、なぜか会いたくなる。人々は、そんな安藤忠雄の姿に魅力を感じるのかもしれませんが。(談)

### 酒井 忠康

さかい・ただやす  
世田谷美術館館長、美術評論家。  
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。  
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。  
光村図書中学校「美術」代表著者。



安藤忠雄を取り上げた雑誌。表紙に直筆のサインと、紙面でも紹介されている「上海保利大劇場」のイラストを添えて、酒井先生に贈られた。

#### 上／「兵庫県立美術館」

外観 兵庫県神戸市 2001年

「兵庫県立美術館」は、阪神・淡路大震災からの「文化の復興」のシンボルとして建設。美術館の基壇部分から連続する「神戸市水際広場」は、防災拠点としての機能も考慮し、全長500mにわたって海沿いに展開する。

#### 左下／「光の教会」

内観 大阪府茨木市 1989年

代表作の一つ。コンクリートの直方体に1枚の壁を斜めに立てかけたシンプルな構成で、正面に十字架のスリット窓を配置している。2017年開催の個展「安藤忠雄展—挑戦—」にて実物大で再現・展示され、大きな話題をよんだ。

#### 右下／「プンタ・デラ・ドガーナ」

外観 イタリア、ヴェネツィア 2009年

15世紀に建てられた歴史的建造物「海の税関」を現代美術館として再生した。日本国内に限らず、イタリア、フランス、ドイツ、アメリカ、中国、台湾、韓国など、世界中で数多くのプロジェクトを手がける。

# 美術部へようこそ! 徳島県北島町立北島中学校

地元の特徴を生かした作品づくりに取り組み、地域との交流を大切にしている美術部取材しました。

## ひょうたんの町, 北島町

北島中学校美術部員が手にしているのは、鮮やかに彩色されたひょうたん。このほど北島町内で開かれた「全日本愛瓢会」の展示会に出品された。

北島町は、周囲を旧吉野川と今切川に囲まれ、その形がひょうたんのように見えることから、町おこしの一環として、祭りなどひょうたんにちなんださまざまなイベントを行っている。今回の展示会もその一つで、全国の愛好家が丹精込めてつくった作品が一堂に並ぶ中、北島中学校をはじめ、近隣の小学校や幼稚園などから出品された作品が訪れた人の目を楽しませていた。

## 生徒の個性光る“百花繚乱”

北島中学校美術部では、「百花繚乱」をテーマに、四季折々の花をモチーフにした絵柄に挑戦。花の微妙な造形や鳥、人物などを細い筆で丹念に描き込んでいく。写実的なものや、日本らしさを追求したもの、人物を配したものなど、それぞれの生徒の個性が光る30個の作品をおよそ3か月かけて作り上げた。

岸濱里奈部長は、「ひょうたんは表面が丸いので、下書きがとても難しかった。金色で下地を塗った上に、アクリル絵の具で着色していくのだが、なかなか色が乗らずに、特に薄

い色を表現するのが大変だった」と制作の苦労を振り返る。

だが、「みんな、最高の出来だと自信がもてる作品をつくり上げることができた。ひょうたんに花を咲かせ、徳島も花が咲いたようににぎわってほしい。そして、これを見た小学生たちが、北島中の美術部に入りたと思ってくれれば」と、作品に込めた思いを話してくれた。

## 地域と美術で交流

同部は、年間で4~5作品に取り組んでいる。その中で、風景画や人物画といった個人の作品に加え、外部への出品なども積極的に行う。これまでもANAからの依頼で、徳島空港へ時間に余裕をもって来てもらうよう、乗客に早期来港をよびかけるポスターを制作するなど、地域との交流を大切にしている。「依頼があれば基本的には断らない。いい作品をつくって外部へ発信し、生徒たちの集中力と意識を高めていきたい」と顧問の白井明美先生は話す。

活動時間が限られている中で、次に意欲的に作品づくりに取り組む生徒たち。白井先生は、特に「集中力」を大切にしているという。42人という大所帯の美術部だが、制作中は、美術室の中は心地よい静寂と緊張感に包まれている。部員や先生方の美術への熱意が伝わってくるようだった。



上/42人と大所帯だが和気あいあい、制作時以外は明るい笑顔が絶えない。  
下/2・3年生を中心に、個性が光るひょうたん30個を3か月かけてつくった。

# 教室を飛びだして

## 横浜美術館 中高生プログラム

子ども自身が美術について考え実践する、横浜美術館の取り組みをご紹介します。



横浜美術館が行う「中高生プログラム」は今年で5回目を迎える。この取り組みは、ヨコハマトリエンナーレ2014のアーティストック・ディレクターを務めた美術家・森村泰昌氏の「現代美術のおもしろさ、そして難しさをも子どもに提供したい。お子様ランチではなくフルコースとして」という言葉から生まれた。

今年も企画展「モネ それからの100年」の開催に合わせ、鑑賞や現代作家との交流など、4か月にわたるプログラムが実施された。中高生の学びの成果が発揮されるのは「こども探検隊」だ。これは、中高生が小学生に向けて展示ツアーと制作のワークショップを行うというもの。その内容の全てを中高生たちが自ら考える。彼らにとって、異年齢の子との交流がもたらすものは大きい。人任せではなく、「自分たちでつくるんだ」という覚悟が生まれるという。

展示ツアーにも制作にも、大人はいっさい干渉しない。スタッフは子どもたちに近づくことなく、彼らだけの世界を見守ることに徹する。1時間におよぶ展示ツアーで、小学生は中高生の言葉に熱心に耳を傾け、飽きることなく質問も飛び交う。年の近い者どうしだからこそ届く言葉があるのだろう。

「美術を通じ、未知のところに踏み出していく子どもを支えたい」と主任エドゥケーターの端山聡子さんは言う。ここは、毎日通う教室とは違う、美術がつなぐ子どもたちの居場所になっている。



「こども探検隊」の展示ツアーの様子。小学生を案内する中高生の姿は真剣そのもの。(写真:加藤健/提供:横浜美術館)

# 放課後

第14回

# ART



第 14 回

「太陽の塔」

おかもと たろう  
岡本太郎

鉄筋コンクリート、塗料他 高さ約70m  
1970年 万博記念公園(大阪府)

※「美術2・3」P.100に掲載

太陽の塔について

太陽の塔は、大きい。

この世界には、太陽の塔を見たことがある人と、太陽の塔をまだ見たことがない人がいて、まだ見たことがない人が想像するよりもはるかに、太陽の塔は大きい。そして、太陽の塔を見たことがある人にとっても、もう一度見ると、それは思ったよりも大きくて、必ず驚いてしまう。

モノレールの万博公園駅を出ると、太陽の塔が見える。万博公園の森の真ん中に、飛び抜けて立っている。万博の期間中は、天辺の金色の顔の真ん中にある二つ目が光って、ビームのように照らしていたというのだから、どれほど迫力があっただろう。

近づくにつれて、その大きさはますます、こちらにのしかかるように、迫ってくる。太陽の塔は、高いし、太い。こんなに太いとは思わなかった、と正面だけでなく横や斜めや、すぐそばや少し離れたところから見て、感じる。この大きさを支えるためにはこれだけの太さが必要なのだが、その太さがかえって奇妙なほどの威圧感を生み出している。

真下までくると、左右に突き出た角のような腕が大きいのに圧倒される。なぜあんな大きくて重いものがくっついているのか、不思議で仕方

ない。真っ青な空に、巨大な腕が浮いている。なんなのだ、これは、と思わずにはいられない。

太陽の塔には、顔が三つある。正面の真ん中にある「現在」を表す顔は、はっきりと力強く、天辺の「未来」の顔は赤ちゃんのように幼い。裏側の「過去」を表す顔は、遠目からは塗り分けられただけに見えるが、下から見上げると、立体的なのがよくわかる。深い色のそれは、見ていられるうちに吸い込まれそうになる。もう一つ、内部の地下にも顔があるのだが、わたしはまだ見たことがない。内部は真っ赤で、人類の歴史が表されている。

万博が開催されているとき、いくつものパビリオンが立ち、信じられない数の人で賑わい、その中心で広大な屋根を突き破るように、太陽の塔は立っていた。その賑わいが消え去った跡に、今は、なだらかな芝生の丘と再生した森が広がる。太陽の塔だけが、同じ場所で立っている。万博公園のいろんな場所から、見える。背中から首にかけての曲線(ちょっと猫背に見える)、子供がよろこんでいるように天に向けられた腕。真っ白に輝く表面。なんだろう、これは、と思う。

柴崎友香  
しばさきともか

1973年、大阪府生まれ。作家。  
2000年、『きょうのできごと』でデビュー。  
『寝ても覚めても』で第32回野間文芸新人賞、  
『春の庭』で第151回芥川賞を受賞。  
その他、『パノララ』『かわうそ堀怪談見習い』  
『千の扉』『公園へ行かないか? 火曜日に』  
『つかのまのこと』など著書多数。  
2018年、『寝ても覚めても』が映画化(濱口竜介監督)。